

# Essay

Sapiarc.com

2009年5月1日(2009-08)

## 再びオバマ大統領のノートルダム大学訪問について

4月10日付けの「ひとこと」で、来る5月17日に行われるノートルダム大学の卒業式にオバマ大統領が招待されており、名誉学位を受け、卒業祝賀演説も行うことが、アメリカのなかでいろいろな問題を惹き起こしていることについて書きました。今回はその続きです。

4月29日のワシントンポストには、女性評論家キャスリーン・パーカー(Kathleen Parker)氏がこの問題について書いた解説と意見が掲載されています。このなかで、新しい動きが紹介されています。

その新しい動きとは、ハーヴァード大学の法学教授で、生命倫理や基本的人権についての発言や著作で知られるメアリー・グレンドン(Mary Ann Glendon)氏が、ノートルダム大学から授与されることになっていたレイターリー・メダル(Laetare Medal)を4月25日になって辞退したことです。グレンドン氏は、かつてアメリカのヴァチカン市国駐箚大使を務めたことのあるカトリック教徒です。なお、laetareは歓びを意味するカトリック用語です。

ノートルダム大学の卒業式で、グレンドン氏も記念講演をすることになっていました。大学の一連の措置を批判する人たちは、大学は、オバマ氏を招待したことに対する攻撃をかわす目的で、グレンドン氏にメダルを授与し、記念講演をしてもらうことを計画したとしています。

これについて、面白い英語表現が使われています。グレンドン氏は fig leaf (いちじくの葉) にされているというものです。ご承知の方が多いと思いますが、ヨーロッパでは、ギリシャ時代の裸体彫刻の恥部をいちじくの葉を模したもので覆うことが行われた時代がありました。グレンドン氏はそれと似た目的に使われているのだというわけです。

このような批判を熟考したであろうグレンドン氏はメダル授与を辞退することに踏み切ったのですが、その裏には、カトリック教徒である同氏が、妊娠中絶に賛成している者にカトリックの大学等は名誉を与えてはならないというアメリカ地区司教の指示に対して、行為として賛同したことがあります。このような個人の考え方や振舞を見ると、アメリカ人の中には、日本人の多くとは違った人たちが相当大勢いるように思われます。

アメリカでも、今では妊娠中絶は法的には認められているのですが、胎児生存権尊重(pro-life)の立場から妊娠中絶に反対する活動をしている人たち(pro-lifer)が大勢います。彼らは、ブッシュ政権が禁じていた胚幹細胞(ES細胞)に関する研究活動を、オバマ政権が一定の条件のもとに推進しようとしていることにも反対しています。今後アメリカで、このような非常に重い意味を持つ問題がどのように展開していくのか、またそれが日本にどのような影響を及ぼす

---

のか、私たちは注目していなければならないと思います。

パーカー氏は、以上のようなさまざまな状況を勘案して、オバマ氏に、ノートルダム大学行きを取り止めることを考慮するよう提案しています。しかし、私は、オバマ氏はむしろ積極的にノートルダム大学に出かけて、カトリックとの和解に努めるのではないかと予想しています。

アメリカ国内では、金融危機から発した大不況、倒産の恐れのある大企業の問題、失業者の急増、保健行政の抜本改革、豚インフルエンザ・パンデミック等々への対処、海外では、イラクでのテロ対策に加えて、治安が悪化しているアフガニスタン、パキスタンへの兵力の増派を含む対応、北朝鮮の核兵器・ミサイル開発への処置等々、文字どおり山積する課題に加えて、宗教の教義や生命倫理にまで気を配らなければならないアメリカの大統領は、超人にしか勤まらないのではないのでしょうか。（おわり）